

HIV 感染者支援の理念形成過程

——「薬害 HIV」感染被害者 Y 氏の来歴にみる日本の HIV/AIDS 史——

和歌山県立医科大学 本郷 正武

1. 本報告の目的——Y 氏の諸活動にみる日本の HIV/AIDS 史の素描

本報告は日本の HIV/AIDS 史上、いわゆる「薬害」感染者と性行為感染者とを包括的に支援する体制づくりに影ながら尽力した、とある「薬害 HIV」感染被害者 Y 氏のライフヒストリーを分析の俎上に乗せる。日本の HIV/AIDS 史は、輸入血漿由来の血液凝固因子製剤による「薬害 HIV」問題に端を発している。アメリカの AIDS 発症事例が日本で 1982 年にはじめて報道された時点で、多くの血友病患者は既に HIV 感染しており、その後の提訴（1989 年）から和解（1996 年）まで日本の HIV/AIDS 史の中心に薬害感染被害者たちは位置づけられる。一方で、性行為による HIV 感染者——とりわけゲイ男性——の存在も、こんにちの HIV/AIDS の社会意識を構成している。特に、生命維持のために不可欠な血液凝固因子製剤により HIV 感染した血友病患者は「被害者」として表象される一方、性行為感染は「自業自得」と否定的な意味づけを付与され、両者を区別する HIV/AIDS 理解が流布された。しかし、このような HIV 感染者の「分断」を積極的に架橋しつつ支援活動を展開する動きが、エイズパニックで騒然とする 1980 年代後半にすでに産声を上げていた。この活動の先頭に立っていたのが Y 氏である。本報告では故人の「評伝」制作から、日本の HIV/AIDS 支援の歴史の再構成を試みる。

2. 使用データ

報告者は Y 氏の未亡人からの依頼を受け、2011 年から縁ある人々への聞き取りを開始した。現在のところ、Y 氏の幼なじみや主治医、後述する NPO スタッフ、サンフランシスコで対応した現地医療スタッフ、通訳などに聞き取りをおこなった。さらに、依頼者から許諾を得て、遺品や当時のニューズレターなどの文書資料を引き取っている。加えて、報告者は 2004 年度より、「輸入血液製剤による HIV 感染問題調査研究委員会」（2002～2010 年度）の調査研究メンバーとして、医師および感染被害者の聞き取り調査に参加した他、その後の継続調査にも関与しており、Y 氏に関する多面的な情報を多くの経路から収集している。

3. Y 氏が残した足跡の背景にあるものを追って

Y 氏は日本の HIV/AIDS 史に 2 つの大きな足跡を残している。一つは、日本で初の HIV 感染者支援をミッションとするエイズ NGO 「HIV と人権・情報センター」を 1988 年に設立したことである。「後天性免疫不全症候群の予防に関する法律（エイズ予防法）」への反対が渦巻くと同時に、エイズパニックによる偏見と差別が極致に達した当時に、あえて感染者支援を打ち出したことはもとより、今で言う NPO の理念を早くに実現させた先見性を確認することができる。もう一つは、「薬害 HIV」訴訟の和解後に着手される治療体制づくりで、薬害感染被害者と性行為感染者とを区別しない支援策の整備に奔走した点である。Y 氏は和解を感染被害者の救済のはじまりであるとともに、よりよい医療体制実現の好機ととらえていた。そのため Y 氏は各地の HIV/AIDS 治療の拠点病院を回り、アンケート調査をおこない、時には自ら受診しながら治療現場の情報収集をおこなった。これらの重要な貢献は、Y 氏が公的にカミングアウトしていなかったことや、周囲がその先見性に付いていけなかったことから、死後になってようやく氏の活動への再評価がなされるようになった側面が多々ある。

このような諸活動に Y 氏を至らせた経験として、本報告では、①障害者自立支援運動へのコミット、②サンフランシスコでの HIV 感染者との出会い、の二点に焦点を合わせて分析する。①では、血友病に特有であった膝関節内出血による障害に向き合う中で、大学のサークル活動から運動にかかわった経験について考察する。②では、Y 氏同様に HIV 感染した血友病患者や医療関係者よりも、ゲイの HIV 感染者との出会いの方が、HIV 感染を告知された直後の Y 氏の心に響いた点を中心に証言を元に論じる。以上から、Y 氏が取り組んだ「薬害」感染と性行為感染との支援の有り様を考察する。